墓地、霊園に新たな価値を見出す。

14TH042　立花　渉

02．死と宗教・死（墓地）の価値

人間は100%死ぬ。死を認識できているのは霊長類の中でも人間だけだと言われている。人間にとって死の発見は生の発見でもあった。生きるということと死ぬということ、生と死を考えることで宗教が生まれた。そして我々はいつの時代も宗教という考えを持って、歴史や国、文化を築いてきた。だが、現代の日本では、様々な宗教の文化が絡み合いながらも、それを信仰心の元に行っている者はそう多くないだろう。また、宗教という言葉にあまりいいイメージを持たない者も少なくはないだろう。宗教（神）という観念が薄くなってきた今、自分の理性を信じ価値を見出して生きる、人間中心主義の時代である。

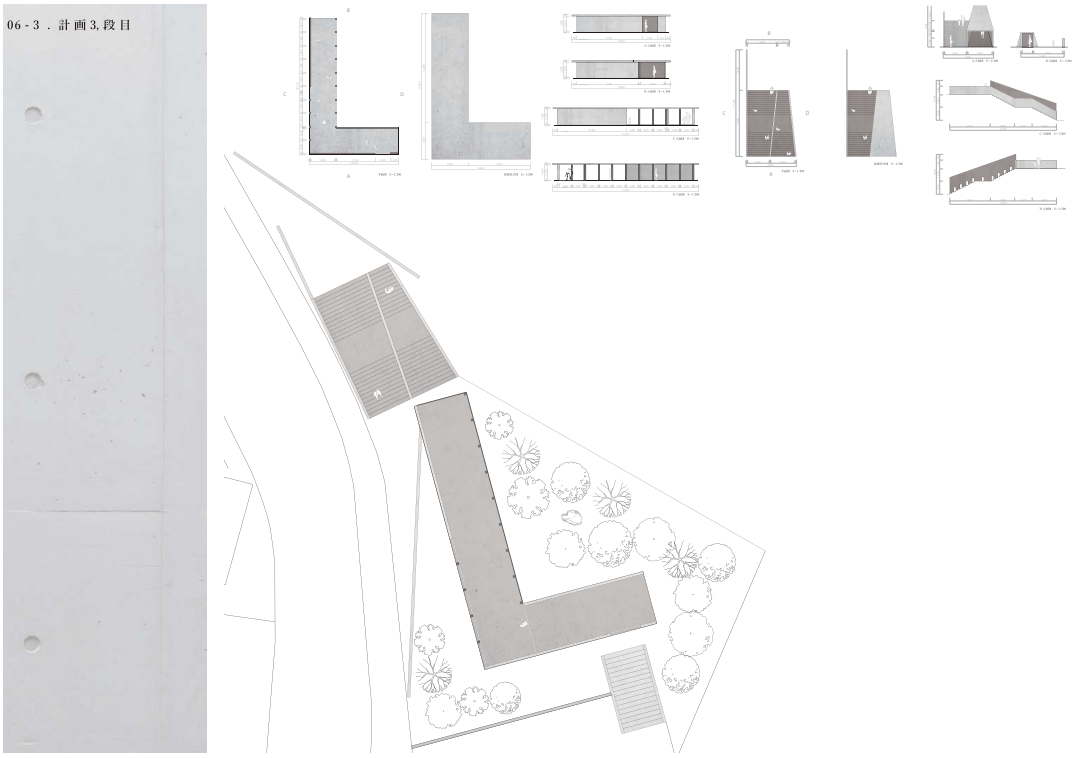
「死」は先人が残した財産である。

我々は日々どのようなことに価値を見出して生きているのだろうか。その時代の定番やトレンドと呼ばれるものから受ける影響や、自身の年齢、経済的要素や精神的要素から見出せるものなど様々だろう。近代の生活空間に目を向けると、機能や効率が充実し、一見自由で豊かな暮らしに見えるが、本当にそうなのだろうか。我々は空間の量や質、目に見えるものばかりに執着して時間という価値を忘れてしまっているのではないだろうか。例えばものに目を向けるときに、そのものはどれだけ高性能なものなのかや、どれだけ使いやすいものなのかではなく、そのものでどれだけ豊かな時間が生み出せたかを考えるべきではないだろうか。2001年の同時多発テロや2011年の東日本大震災などの衝撃的な死は、我々に生きる意味（時間の価値）を考えさせ、生活や消費に対する価値観を大きく変えてきた。だが価値観を変えながらも、直接的、また間接的な関わりがない者はどこか他人事のように感じているのではなかろうか。墓地や霊園という空間にある身近な死は、自らの出生を確認する場であり、また自らが未来の生命の源であること、また自らの未来の死を認識する場でもある。自分にもいつの日か死が訪れる。そこにある過去の死は、機能や効率が充実する我々の生活の中で時間の価値を示してくれるものではなかろうか。生きている人のためばかりに作られた現代。また、死を考えるための宗教という1つのツールが失われ始めた時代に、我々は墓地や霊園という死の空間に対して時間を考える場としての価値を見出さなければならない。人生という限られた時間を認識し、普段の生活での価値観を見直さなければならない。

03．設計方針

先祖の死に向き合うために心の整理をする道の提案。

04．敷地　三日月山霊園　福岡市東区大字香椎402番地の1

銅賞

指導教員講評　　建築は、生きる者のためだけにあるわけではない。近代建築以前の「建築」では、テーゼとして通用したが機能や経済を軸にした現代では、生きる者のみが建築の対象である。経済や機能は、人間は死なないことを前提とする。そんな現代社会に対して死者にとっての建築をテーマに取り組んだ作品である。前近代が対象にした権力や財力や能力を持った特別な死者ではなく、誰もがやがてなる死者の建築である。